

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県の国語教育史に関する実証的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 梶村光郎 公開日: 2009-09-08 キーワード (Ja): 国語, 地域, 方言, 国語教育, 国家, 沖縄, 共通語, 作文, 日本, 大和(日本), 地域(沖縄), 標準語(共通語), 教育, 日本(本土), 近代学校, 文化, 言語改良(運動), 言葉 キーワード (En): area, state, culture, education, language 作成者: 梶村, 光郎, 村上, 呂里, Kajimura, Mitsuro, Murakami, Rori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/12427

宮良當壯と『日本の言葉』

梶 村 光 郎

Miyara Toso and “NIPPON no KOTOBA”

— “The Magazine on Language in Japan” Published by Nippon-no-kotoba-kenkyukai —

KAJIMURA Mitsuro

はじめに

沖縄県の国語教育史に関する実証的研究を進めている過程において、偶々八重山出身の言語研究者としてその名を知られた宮良當壯が戦後初期に編集した国語雑誌『日本の言葉』全7冊を東京の古書店より入手することができた。この雑誌については、以前に国立国語研究所で閲覧する機会があり、それ以来関心を持ち続けていた。それでこの雑誌とその主宰者である宮良當壯について知りたいと考え、少しづつ『宮良當壯全集』（第一書房発行、以下全集と称する）や宮良に関する研究論文などを読んでいた。しかし、国語雑誌『日本の言葉』について言及しているものは、ほとんど見あたらなかった。わずかに、全集の第20巻の「解題」を執筆した宮良当章が、「二十二年二月、『田舎の言葉』を脱稿、放送出版協会へ原稿を渡す。五月から月刊雑誌『日本の言葉』をアポロ社より刊行し始め、二十三年九月の第七号まで続刊。」（746頁。）と、簡単に触れている程度であった。他には、全集の第16巻や第17巻に掲載された論稿についての「書誌」の欄において、『日本の言葉』が出典となっていることが示されているのが特に目に付く位であった。しかし、それらにおいては出典として取り上げられているのみで、この国語雑誌の出版事情や性格といった内容に関することなどについては何も触れられていなかった。教育・国語教育史の研究を行っている筆者からすれば、専門分野が違うために国語学や沖縄学と関わる『日本の言葉』に関する研究文献を見落としている可能性もあるかもしれない。しかし、現在管見するかぎりで言えば、『日本の言葉』を研究対象にしたものに関しては、上記のような研究状況にあると言える。

それではどうして『日本の言葉』に関する研究がこれまで行われてこなかったのだろうか。その原因としては、この雑誌が敗戦後の混乱している1947（昭和22）年6月1日に創刊された、地味な国語学関係の専門雑誌であり、発行部数が二千部^①と少なかったことや、この雑誌の発行母胎となった日本の言葉研究会の会員数が、後述するように1948年3月1

日現在で263人という状況で、直接この雑誌を入手できた人達が多くなったことが、まず考えられる。次に、教育・研究機関、図書館などにこの雑誌が所蔵されていないか、あるいは所蔵されていても所在が確認しにくい場所に保管されており^②、一般に目にすることができるないことが考えられる。そういうことなどが原因となって、『日本の言葉』に触れる機会がなく、研究が行われなかつたというのが実情なのではないだろうか。今後の検討課題のひとつである。

そこで今回、小論において、『日本の言葉』全7冊を手がかりにして、この雑誌の発行事情や性格を明らかにすると同時に、この雑誌が今後宮良當壯研究や沖縄県の国語教育史の研究において、どのような資料的意義や可能性があるかについて検討していくことにする。

1. 『日本の言葉』の創刊意図と背景

『日本の言葉』は、1947（昭和22）年6月1日に、編集者宮良當壯、発行者遠藤欣一郎、印刷所アポロ社（東京都港区芝新橋3-2）、発行所日本語研究会（東京都世田谷区世田谷1-200）という形で創刊された。その経緯を、戦後遠藤は次のように回想している。

「そのころ、先生は宿願だった日本方言研究所を設立され、機関誌をだしたいというお話を承ったので、臆面もなく発行のお手伝いをしましようと申し出たところ、間もなく柳田国男・東條操両先生から直々、有難う、君のお蔭で戦後はじめて、こういう本が世に出ることに感謝しているというお言葉をいただいた。」^③

これによれば、『日本の言葉』は、宮良が1943（昭和18）年に設立した日本方言研究所の機関誌という位置づけで企画され、遠藤や柳田、東條らに支援されて発行されたということになる。この雑誌が、日本方言研究所の機関誌であるかどうかという点については、日本方言研究所の設立の時期と『日本の言葉』の創刊の時期のズレなどの問題もあり、検討が必要なので速断はできない。しかし、その後に続けて述べた部分については、発行者として遠藤の名がこの雑誌に掲載されていることや、執筆者として柳田や東條の名が見えている^④点から判断して、彼らに支援されてこの雑誌が発行されたということは言えるであろう。中でも柳田は、発行者である遠藤を除いて、宮良にとって特別な存在であったようである。そのことは、全集第21巻に所収された、宮良の日記の次のような記述から言えることである。

「（昭和二年一月四日）十月四日（金）曇後雨 ……柳田国男先生から久しぶりにお葉書を頂いた。中食後参上。自転車で三十分、上つて先生に久方ぶりにお目にかかりました。先生は長椅子で休んでゐられた様子。お孫さんに、大事な話があるから本宅の方へ行つて遊ぶやうにいはれた。私の今後進むべき道について考へて下さつたのである。第一は、国民学

校を卒業して上級学校へ進む者は十五パーセントで、残りの八十五パーセントの者はそのまま家業に就く。それ等の人達に平易な文体で値のある物を読ましたい。国語の新運動は根底をここに置くべきだ。そこで、先づ永年旅行した所の面白い事柄を捕らへて、一題十枚程度で書く。新しい子供の雑誌等に載せる。又、幾つかを纏めて単行本にする。書名は『日本の隅々』『田舎と言葉』等とする。第二は、先生が問題にしてゐて、未だ充分な資料が見つからず書けなくて困つてゐるものが幾つかある。これについて話をするから纏めて書いて呉れ。兎に角、月、木、土、日に時々来ること。火、金、は散歩。水は枢密院へ行かれると。又、今日まで旅行した所の目録を書いて寄越して呉れ。自分の歩かない所もそれで分かるからと。……」（368頁。）

「（昭和二三年一樋村）一月四日（日）晴 辻村敏樹君を訪ぶ。金田一氏の教科書の編輯助手をしてみると。柳田先生を訪ぶ。『日本の言葉』のことにつき話す。遠藤氏の来談を待つと。一昨年借用せし一千円をお返ししようとすると、別途貯蓄して困つた時に借りないで済むようにせよと。誠に感謝に堪へない。」（420頁。）

つまり、宮良にとって、柳田は研究の相談や金銭の支援までしてくれる存在、恩師なのである。『日本の言葉』の創刊の背景に、柳田のような有力な支援者がいたということは記憶しておいてよいだろう。ここでもうひとりの有力な支援者である、遠藤欣一郎のことでついても触れておきたい。そのことで、『日本の言葉』の創刊の事情が明らかにできると考えるからである。

宮良が遠藤の存在を知るようになるのは、上京後何くれとなく世話をしてくれた言語学者の前田太郎の息子前田竹虎が遠藤の経営する絵刷事業を行っているアポロ社の手伝いをするようになってからだった。1946（昭和21）年12月13日の日記には、そのことが次のように記されている。

「竹虎君、遠藤欣一郎氏、大杉直治君の三人にて大江恒吉氏（光村原色版印刷所の相談役）を訪ね、大杉君は東洋印刷に、竹虎君は遠藤氏のアポロ社にて修業することとなれりと。」（全集第21巻、379頁。）

遠藤と宮良が初めて会ったのが、翌年の1月4日で、その日の宮良の日記には、次のように出会いの様子が記されている。

「間もなく、竹虎君が鵠沼の遠藤欣一郎氏を伴つて帰宅した。八重山まで旅行した人であるから、南島の話に花が咲いた。三年間に六回旅行したといふ。成城大学を出てから南洋まで行つたといふから相当旅慣れた人だ。絵刷事業をやつてゐるが、将来は出版方面にも乗り出す考へらしい。七時過ぎまで話をして去られた。」（全集第21巻、389頁。）

遠藤が八重山を三年間に六回も旅行したということで話に花が咲いたと宮良は言う。一方、遠藤の方は、「宮良當壯先生を偲ぶ」（『宮良當壯全集 月報16』第一書房、1984年4月）

の中で、宮良との出会いとその後の交流について、次のように回想している。

「世田谷区下北沢の前田家は戦災を逃れることができ、前田君の出征中、金田一春彦氏がここに仮寓しておられたが、前田・金田一両氏のご縁で、宮良當壯先生と対面すること叶った。私は、かつて石垣島へ行ってきたこと、宮良家で一杯の水をいただいたことなど不思議な因縁を感じたが、宮良先生からは折に触れ、ベテルハイムの聖書翻訳のこと、おもろ・中山伝信録・琉歌・戯曲・方言のことなどについて教えを乞うた。また『日本の隅々』『南島叢考』『八重山語彙』『東北方言と南島方言との比較研究』などを恵与され、藤沢から東京への通勤列車で読ませていただいた。」（5頁。）

遠藤の回想を裏付けるような記述が、1947年1月8日の宮良の日記に見えるので、それを紹介する。

「竹虎君は、遠藤欣一郎さんの『八重山語彙』を五冊位に分冊して出版したいというふ意向を伝へて來た。広告を出して予約募集をして見ようといふ。僕は、東洋文庫の了解が必要だし、それよりも書き下しの物を出版する方が購読者も多かろうと答えた。『南島方言と東北方言の比較研究』を進呈するやうに托した。」（全集第21巻、390頁。）

こうして、二人の交流は急速に深まっていき、同年1月13日には前田竹虎を介して「遠藤欣一郎氏が四月から當壯個人雑誌を出したいので計画して貰ひたいと。」（全集第21巻、390～391頁。）という申し出が、宮良になされるのである。この雑誌発行の件を、宮良は承諾し、『日本の言葉』の創刊ということになっていく。その際、遠藤から次のような条件が付与されたという。

「夕刻、前田家にて遠藤欣一郎氏と雑誌の打ち合わせ。用紙を五万円程買ひ、原稿用紙も作ると。会費は一年百円とし、一冊一円の利益で二千部印刷する。その二千円は編輯者に研究費として呈すると。」（全集第21巻、397頁。）

宮良にとって、このような遠藤の申し出は願ってもないことであった。1925（大正14）年3月に國學院大学を卒業して以降、同年4月から1943（昭和18）年に日本方言研究所を創設するまで宮内省図書寮に勤務していたが、この当時は執筆活動と農耕の生活を送っており、定期的に安定した収入を得ることができなかつたからである。遠藤は、「このころ宮良先生はご自宅附近の畑で糧米や野菜を栽培され、晴耕雨読・自給自足の生活をされ、研究生活の苦闘時代とお見うけしたがいつも明るい顔で接してくださった。」（前掲月報16、5頁。）と、当時の宮良の生活ぶりを書いているが、この宮良の苦闘ぶりを知っての申し出であったと思われる。遠藤を宮良の有力な支援者のひとりと考える所以である。

ところで、『日本の言葉』は、発行所日本の言葉研究会と、創刊号の奥付にあり、1947年3月末日に会員も募集して、同年6月1日に創刊された。このことから、この雑誌は遠藤が申し出た「當壯個人雑誌」ではないことが分かる。また、発行所が、宮良が1943

年6月末に創立したと考えられる日本方言研究所ではなく、日本の言葉研究会であったという事実を鑑みれば、この雑誌が日本方言研究所の機関誌であるということは言えないであろう。このことは、『日本の言葉』の創刊号に「私の夢」と題して、遠藤が次のように書いている文章からも窺えることである。

「國際平和の遵奉者としての今後の世界に立つ日本が均整のとれたいい言葉も有ち、外國には考えられぬ程の多くの問題を有つ現在の日本、端的に云えば素人考えでさえも、カナ、ひらかな、ローマ字、多くの方言、愈々多くなる外来語、漢字の問題、時勢の進捗につれて變つて行く日本語それ自身のこと、とり残されんとするあの雅味ある古典文學等々、これを俎上に載せて大マジメに考えて行く機関として——勿論學會はあるにはあるであろう——自由に討議し、考究して行くことに何か寄與するものがあつてもよい」

つまり、発行者の遠藤は、敗戦後日本の日本語=「国語」の現実と改革の問題を討議し、考究していく機関誌として『日本の言葉』を位置づけているのである。宮良が日本方言研究所でやろうとしていた各地の方言の調査・研究を超える日本語全体の問題を検討する研究会として、日本の言葉研究会が組織され、その機関誌として『日本の言葉』が創刊されたとみることができる。宮良も創刊号に「新しい言葉改良への胎動」と題する以下のようないい「卷頭言」を書き、言葉改良の運動を呼びかけているのも、その見方を裏付けているように思われる。

「少なくとも日本中には、今日の國語が大分乱れかけていると感じて、これをこのままに捨てておけない、何とかしなければならないと、うずうずしていられる方の多いのは確かである。恐らくこれは日本人である以上、誰しも同じ気持ちであろうと私は考える。——國語を話すのは、われわれ國民お互であるから、これを立派に育て護つて行くのも、われわれお互でなければならない。この盛り上がる力によつて、國語の浄化をはかろうではありませんか。われわれのこの本部のはたらきが、迎え水となつて、全國に支部の出来る日のあることを望んで止まない。」

以上のような、宮良や遠藤の『日本の言葉』と日本の言葉研究会の任務に対する見解を見るならば、この雑誌が日本語の改良を進める言語改良運動の機関誌として位置づけてよいだろう。そして、この日本語の言語改良運動は、時宜に適うものであった。「國語國字問題の動向」（『生活学校』1946年10月）を執筆した滑川道夫の次のような観察はそのことを示すものである。

「終戦後、山本有三・藤村作・金田一京助・安藤正次氏等が主となって、國語民主化の運動が展開した。ローマ字論者もカナモジ論者も漢字制限論者も、それぞれの各運動團體も根本的な國語革新の動向の自覺に立つて、それぞれの主張のいはば最大公約数的民主戰線としての『國民の國語運動連盟』の結成を、はかつたのが、昭和二十一年一月末であつ

た。……創立後間もなかつた『國民の國語運動連盟』は改正憲法草案の文體を口語體にすることを始め『國民の國語』たらしめるための運動を着々と實行に展開してゐる。この運動と調子を合わせて、言語文化研究所・三鷹國語研究所等の研究活動が活パツ化している。」(16~17頁。)

宮良等が創設した日本の言葉研究会の名がここに示されていない大きな理由の一つは、この論稿が執筆された時点において、この会がまだ組織されていなかつたからであろう。しかし、1946年3月5日と7日に第一次の米国教育使節団（ストッダード団長以下27名）が来日して「国語の改革」を含む日本の教育改革に対する方針を示したことと、この滑川の文章が示しているような状況からも、『日本の言葉』が創刊される必要性や背景が窺えよう。と同時に、これが日本方言研究所の機関誌としてでない形での創刊であった大きな理由のひとつも、その点（言語改良運動の全国的展開・進展）にあったと考えられよう。言語改良運動の全国的な展開状況を少し補足しておくと、「國語民主化實行申合せの集まり」が1946年1月24日に開かれ、同年の4月6日に「國民の國語運動連盟」が成立している。そして、連盟は次のような12項目の方針^⑤を掲げて運動を展開したのである。

1. 文體は口語體にすること。
2. わかりにくくい言ひまわしはやめること。
3. わかりにくくことばは使はないこと。
4. 讀みにくくい漢字は使ないこと。
5. あて字はやめること。
6. 接続詞・副詞・代名詞はなるべくかながきにすること。
7. 動植物の名まえは原則としてカナがきにすること。
8. 地名はなるべくカナがきにすること。
9. ふりがなはやめること。
10. 横書は左から書くこと。
11. 略體のある漢字はなるべく略體の方を使ふこと。
12. 送りがなは読みちがひのないやうに送ること。

2. 『日本の言葉』の発行状況と雑誌の目次構成

全国的な言語改良運動の機運と有力な支援者の存在と宮良の言語研究に対する熱意を背景にして、『日本の言葉』は創刊されたが、行数や字数を除き、宮良が1947年4月11日の日記に記述している次のような体裁で通巻第7号まで発行された。

「四月十一日（金）晴 創刊号の原稿を携えてアポロ社へ行く。遠藤氏と打ち合わせて、貢付けをした。四六倍判、三十二頁。一頁二段組、一行二十一字詰、四十八行。一頁二千十六字、三十二頁六四、五一二字。二百字詰原稿三百二十三枚。」（全集第21巻、403頁。）

当初、『日本の言葉』は月刊雑誌として企画され、定価は創刊号時において郵送費月2円、雑誌本体では一ヶ月20円、六ヶ月120円、一年240円であった。しかし、毎月1日発行という定期刊行が守られたのは第1巻第5号（1947年10月1日号）までで、通巻の第6号は翌年の3月5日に第2巻第1号として、通巻の第7号である第2巻第2号は9月1日に発行されるというように、毎月の定期刊行体制が崩れていった。

毎月の定期刊行体制が崩れたのは、出版部に所属するK・E即ち遠藤欣一郎が執筆した「遅刊の辞」（『日本の言葉』第7号）によれば、次の三点からであった。

- (1) 増大するインフレの影響。
- (2) 日本の言葉研究会の財政的基盤の弱さ。
- (3) 専門誌という性格からくる読者数の少なさ。

「遅刊の辞」に基づき、『日本の言葉』の毎月1日発行という定期刊行の体制が崩れた理由を見てみよう。

- (1) について、遠藤は次のように述べる。

「幾何級数的に増大するインフレに伴ない、既に出版部は約十二、三萬圓の赤字も意に介せず、實際を申せば一部30圓の本誌は、その消化状態からの面から言うと一部65圓強になつて次第で、バックナンバーは出版部に山積みしています。／然し幸い、次から次へと読者が増大して行くことが、ペニシリン千単位くらい注射している程度の力を以てやつと生存をつづけている状態です。」

「赤字も意に介さず」と言いながら、読者の増大を貴重なペニシリンに喻えつつ、増大するインフレに対応しようとしていることが窺える。宮良の1947（昭和22）年8月25日の日記にも「アポロ社へ行く。遠藤氏より、用紙、工賃の値上げにより、『日本の言葉』第四号より三十円に値上げ頼むと。」（全集第21巻、409頁）とあり、インフレの影響が雑誌を直撃していたことが窺える。

- (2) について、遠藤は次のように述べる。

「もともと、あのひたむきな宮良氏を始め、同學の士の旺盛な學究心に深く感動して何等の経済的基礎を持たぬ出版部が、僅かな力を以て事に当つた事それ自体が冒険、否ドンキホーテ式な武者ぶりであつたのです。」^⑥

宮良自身農耕と文筆活動をしながら生活を維持していたのであり、出版は遠藤らの援助

があつて実現したのである。また、出版の援助者である遠藤は、戦争で焼け出された身であり、事業が軌道に乗ってきて援助できる状態にあつたとはいえ、財政的にそれほど余裕があつたわけではない。それがインフレにより、急速に圧迫されて思うように援助ができなくなつたということであろう。

(3) について、遠藤は次のように述べる。

「ここで、せめて本誌の購読者を経済限度まで増加する運動に御協力願います、具體的に言うと、恒讀者（コンスタントリー、リーダーズ）を3000人にしたいということです。それには各々が2人の讀者を紹介し獲得して下さるようひたすらお願ひしたいのです。」^⑦

「恒讀者」の紹介・獲得を讀者にお願いをするという形で、『日本の言葉』の継続発行を意図していたことが分かる。しかし、1948年3月1日の宮良の日記を見ると、「『日本の言葉』の会員がポツポツ増える。土佐の土居重俊氏が二百六十三番で入会された。」という記述があるが、その後入会者の記述が見えなくなっている。

したがつて、遠藤の「恒讀者」の紹介・獲得のお願いの効果はあまりなかつたのではないかと思われる。そのためかどうかを断定するのは難しいが、1948年の4月17日の日記には「『日本の言葉』第八号の執筆や割付に努力す。横井氏の原稿に附記す。」とあるが、翌月の23日には「アポロ社へ行き、『日本の言葉』の発行方法につき打合わせをなす。」となり、ついに6月の22日には「常磐松小、実践専門学校、国大の折口先生を訪ひ、アポロ社へ行く。『日本の言葉』出版方法変更の印刷物を会員に発送せりと。」書かざるを得なくなつたのである。この事実は、遠藤の言う経済限度としての3000人の讀者を獲得できなかつたということである。こうして、第八号の準備を宮良は進めていたが、インフレと讀者拡大の失敗により、『日本の言葉』の継続発行を断念せざるを得なかつたのである。

次に、『日本の言葉』の性格を検討するために、この雑誌の目次を掲げることにする。

目次は、氏名を除き常用漢字を使用。論稿は、割り付けられている順序にしたがつて並べた。そのため、特集として組まれた論稿が部分的にその欄から離れたので、特集の論稿であることが分かるようにナカグロを付した。途中まで特集に組まれていた論稿が、雑誌目次の上で特集からはずれたものが出てくるが、それは雑誌の目次にしたがつた。以上のこととを断つておく。

『日本の言葉』の目次構成

第1卷第1号（1947年6月）

目次

新しい言葉改良への胎動

宮良當壯

日本の言葉次号予告

日本の言葉発刊にあたつて	宮良當壯
執筆者紹介	無署名
個人消息	無署名
・青森の民謡	宮良當壯
言葉への反省	杉村直子（當壯の筆名）
耳壺の耳	八重山方言研究会
横組みとかなづかい	無署名
言葉の育て方	大西雅雄
五月課題	無署名
寄稿歓迎	無署名
寄贈図書雑誌	無署名
日本方言音表	宮良當壯編
日本の言葉の発音とその書き表し方（1）	宮良當壯
学界消息	無署名
新刊紹介	無署名
意味のない言葉	釘本久春
《特集》	
・日本の言葉と方言	東條操
会員の声	渡邊敦他
・方言のくに「日本」	宮良當壯
「日本の言葉」創刊につき—激励と祝詞—	(柳田国男／東條操／釘本久春／服部四郎／今泉忠義)
・青森県の方言（1）	宮良當壯
・「私の夢」	遠藤欣一郎
編集後記	宮良當壯
ご挨拶	遠藤欣一郎
・青森方言の花園	日本方言研究所

第1巻第2号（1947年7月）

目次

諸学の復興	宮良當壯
創刊号目次	
次号予告	

言葉の力	遠藤欣一郎
新刊紹介	遠藤欣一郎
憲法の言葉	大西雅雄
学界消息	無署名
5月会記	宮良當壯
「閣下」という敬称は使わないこと	宮良當壯
清少納言の言語意識	荒木田楠千代
執筆者紹介	無署名
個人消息	無署名
「新かなづかい」と音図	本位田重美
7月課題	無署名
寄贈図書・雑誌・新聞	無署名
新かなづかいの文法—その新しい活用法の立て方について—	三宅武郎
寄稿歓迎	無署名
漢字のわざはひ	勝俣久作
耳壺の耳—キンピイディ リイー	八重山方言研究会
日本の言葉の発音とその書き表し方（2）	宮良當壯
《特集》	
・秋田方言をえがく	東條操
・青森の童話	宮良當壯
・琉訳聖書の研究（1）	宮良當壯
会員の声	木村康一他
編集後記	宮良當壯
秋田方言の花園	日本方言研究所

第1巻第3号（1947年8月）

目次

卷頭言 言葉と同胞愛	宮良當壯
日本の言葉次号予告	
国語史の目的と方法	柳田國男
文字価値論の諸項目（1）	神保格
日本の言葉の発音とその書き表し方（2）	宮良當壯
「の」の一つの用法について	松村明

《特集》

・方言境界線の問題—岩手方言に例をとる—	東條 操
執筆者紹介	無署名
6月会記	無署名
寄贈図書雑誌	無署名
・磐城方言の中に見える古語	廣瀬敏子
新刊紹介	無署名
・紫波郡の動物・植物の方言	工藤はやと
・浄法寺のボバダクワイギ	宮良當壯
・クソベーという方言のこと	桂井和雄
耳壺の耳—ピィーダーとユーダー	八重山方言研究会
学界消息	無署名
・琉訳聖書の研究（2）	宮良當壯
新刊紹介	無署名
言の葉かけ	大西雅雄
8月課題	無署名
寄稿歓迎	無署名
会員の声	内藤吉助他
編集後記	宮良當壯
・岩手方言の花園	日本方言研究所

第1巻第4号（1947年9月）

目次

卷頭言 本誌の性格	宮良當壯
日本の言葉次号予告	
標準語のために	金田一京助
琉球民族とその言語	宮良當壯
文字価値論の諸項目（2）	神保 格
敬語接頭辞「お」について（1）	辻村敏樹
複合形容句	池田弘子
個人消息	無署名
国語の改革と候文	浅野 弘
耳壺の耳—「ティーロー」など	八重山方言研究会

《特集》

・「やんか」の研究（1）	堀田要治
芭蕉の葉	宮良當壯
命名	宮良當壯
スクラップから	宮良當壯
・山村暮鳥と青森方言	上野 勇
寄贈図書雑誌	無署名
・箱根地方の方言（1）	勝俣久作
琉訳聖書の研究（3）	宮良當壯
言の葉かげ	大西雅雄
消息	無署名
執筆者紹介	
日本の言葉—団体申込の特典—	日本の言葉研究会
会告	出版部
編集後記	編集子
・山形方言の花園	日本方言研究所

第1巻第5号（1947年10月）

目次

卷頭言「新かなづかい」の採否	宮良當壯
日本の言葉次号予告	
日本語のある特徴	A・M・ハルバン
新刊紹介	宮良當壯
日本語の敬語—ロドリゲス著日本大文典より（1）—	土井忠生訳
執筆者紹介	
寄贈図書雑誌	
個人消息	無署名
外ゆく波の外心	佐伯梅友
出版部移転	
文字価値論の諸項目（3）	神保 格
静岡の「みるい」について	宮良當壯
敬語接頭辞「お」について（2）	辻村敏樹
学界消息	

四国の山村	宮本常一
《特集》	
耳壺の耳—「オイシイ・ムヌ」など—	八重山方言研究会
・「やんか」の研究（2）	堀田要治
新刊紹介	無署名
・箱根地方の方言（2）	勝俣久作
・課題解答 みるい	
・琉訳聖書の研究（4）	宮良當壯
・青森県田名部方言会話	杉山麗子
新刊紹介	無署名
寄贈図書雑誌	
編集後記	編集子
・宮城方言の花園	日本方言研究所

第2巻第1号（1948年3月）

目次

卷頭言 漢字と日本人	宮良當壯
日本の言葉次号予告	
日本語の敬語—ロドリゲス著日本大文典より（2）—	土井忠生訳
古典と漢字制限（記事）	今泉忠義
当用漢字の発音整理（記事）	
執筆者紹介	
昨今の国字問答	大西雅雄
五十音図と音階の構成	田邊尚雄
言語と民族研究	大藤時彦
基督教徒の作った日本語	比屋根安定
学界消息	宮良當壯
琉訳聖書の研究（5）	宮良當壯
《方言特集》	
・八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について—（1）	北條忠雄
・箱根地方の方言（3）	勝俣久作
耳壺の耳—「ドゥー ヌ ミシャ」など	八重山方言研究会
・方言手帳から（山形県鶴岡市、東田川郡本郷村、新潟県岩船郡中俣村小俣）	中村亮雄

編集後記

・福島方言の花園

編集子

日本方言研究所

第2卷第2号（1948年9月）

目次

卷頭言 ローマ字への魅力	宮良當壯
日本語の敬語—ロドリゲス著日本大文典より（3）—	土井忠生訳
敬語接頭辞「お」について（完）	辻村敏樹
執筆者紹介	
個人消息	
読めない言葉	模垣 實
琉訳聖書の研究（6）	宮良當壯
《伊波普猷先生追悼特集》	
○琉球学の創始者	宮良當壯
○伊波先生のこと	仲原善忠
○伊波先生を悼む	遠藤欣一郎
新刊紹介	
《方言特集》	
・八丈島方言の研究—特に上代性の遺存について（2）—	北條忠雄
学界消息	
耳壺の耳—「ネーラーとナーラ」—	八重山方言研究会
・山口なまりの「あのソ、このソ」	藤原與一
学界消息	O 生報
遅刊の辞	K. E
・新潟方言の花園	日本方言研究所

3. 『日本の言葉』の性格と資料的意義

前掲の目次構成から、この雑誌の内容が一定程度窺えるが、読者達から寄せられたこの雑誌の性格に関する質疑に対して、宮良が回答している論稿が第1卷第4号に掲載されているので、それを手がかりにしてこの雑誌の性格を検討していこう。手がかりとするその論稿は、「本誌の性格」と題する第1卷第4号の巻頭言である。

宮良は、『日本の言葉』の性格に関する「質疑的なもの」のうち、主なものとして次の4

点をあげる。

- 第1. 箇人雑誌にするのか、綜合雑誌にするのか。
- 第2. 方言を主とするのか、標準語を主とするのか。
- 第3. 本誌の主張は何か。
- 第4. 國語運動の意義と方法。

これらに対する宮良の回答はどうであったか。以下、それを要約したものを示しながら、検討することにする。

第1に対しては、「本誌は箇人雑誌でないことを明言しておく。會員相互の研究發表を主とするものであるから、言うまでもなく純然たる綜合雑誌でなければならない。」と回答した。この回答は、既に述べたように、日本方言研究所ではない日本の言葉研究会の機關誌として、『日本の言葉』が創刊された事実から、当然に予想されるものであった。しかし、「創刊号は編集後記でも述べておいたように、短時日の間に編集したために、ご覧の通りのものとなつた譯である。しかし第2號以下では出来得る限り諸家に執筆を願うつもりである。」と弁解しているように、創刊号は宮良の個人雑誌と思われるくらい宮良が登場しているのである。1947年4月7日の日記に「創刊号の支度は苦しい。金を掛けずにといふ方針で、杉村春子といふペンネームを作り、『言葉の反省』を自分で書く。」と書いている杉村春子は、これまで指摘されなかつたが、實際は杉村直子の筆名で掲載された宮良の論稿である。それとも加えると、宮良の執筆になる主要な論稿は8編である。宮良以外の執筆者の主要な論稿は、大西雅雄、釘本久春、東條操、遠藤欣一郎の4編だけである。埋め草の文章も宮良のものが多く、全体的な印象からすれば、宮良の個人雑誌と称されても仕方のないものであった。しかし、「第2號以下では出来得る限り諸家に執筆を願うつもりである。」と書いているように、第2号以下からは宮良以外の論稿が多数を占めるような状況になつてきた。その点で、宮良の弁解通りであった。ただ、細かい点であるが、宮良の文章の誤りを指摘しておきたい。「本誌の性格」は、第4号に掲載されたものである。だから、ここに書かれた文章に正確さを求めるのならば、「第2號以下では出来得る限り諸家に執筆を願うつもりである。」という一文は、過去に遡れないのだから「第2號以下では出来得る限り諸家に執筆を願つたつもりである。」としなければならないだろう。

以上述べてきたことから、この雑誌の性格について言及すると、当初は宮良の個人雑誌のような形で出発したが、第2号から日本の言葉研究会の機關誌に相応しい多数の會員が執筆する「綜合雑誌」という性格が強まってきたということである。

次に、第2の方言を主とするのか、標準語を主とするのかという問題についての宮良の

回答をみてみよう。

「第2は國語全体を考究の目的とするものであるから、標準語・方言、その何れも偏することなく、飽くまで全般的に國語問題を取り扱つて行く考えである。しかし、方言は國語全體から見て、廣大なる地域を占めるものであるから、凡そ本誌の3分の1程度の分量を掲載することになるであろう。」

『日本の言葉』に対する宮良と遠藤の位置づけからすれば、どちらにも偏しないと回答するのは妥当である。ただこういう質疑が提起されたのは、創刊号において方言関係の特集が組まれ、第2号、第3号と以下継続されているところに一つの原因があるようと思われる。また、創刊号は、その特集の他に、宮良編の「日本方言音表」や「日本の言葉の發音とその書き表し方（1）』（宮良執筆）という方言研究の論稿が掲載されており、全体的な印象から方言研究を中心とした国語雑誌という性格が強かったからであろう。しかし、宮良が方言関係の論稿に本誌の3分の1程度の分量を第4号以下に与えていくと述べているのは注目される。大正期から方言の全国的な調査研究を行い、1943年から日本方言研究所を創設して方言研究を進めてきた宮良のリーダーシップがこういうところに現れていると見ることができよう。この点を『日本の言葉』の性格づけと絡めて言えば、方言研究にひとつの大きな特徴があるということであろう。

第3の本誌の主張は何かということについての宮良の回答は、次の通りである。

「本會は國語の科學的研究を基礎として今日の言葉を正しくし、明日の言葉を美しくすることを目指すものである。それには現在の日本語の地理的分布の實相を知り、過去の國語の歴史的變遷の状態を究めねばならない。かくして國語の日本的性格を飽くまで堅持して行くことを念願するものである。」

ここには、日本語の科学的研究をもとに、日本語の言語改良を目指す立場がはっきりと示されている。そして、方法論として、現在の日本語の地理的分布の実相と日本語の歴史的変遷を追究するという立場を採用するということが示されている。それは、これまで宮良が行ってきた方言研究の方法を踏まえた日本語研究であり、その立場から、日本語の言語改良を行っていくという主張である。戦前の言靈思想に基づく非科学的な言語研究や、觀念的で国家主義的な言語研究と比較すれば、宮良が示すこの科学的な研究に基づく日本語研究は、進歩的な且つ時宜に適った研究の立場の一つであろう。こうした科学的な日本語研究を進めて言語改良を行うという立場も『日本の言葉』を特徴づける性格のひとつであろう。

第4の國語運動の意義と方法に対する宮良の回答は、「一國文化の興隆は知識の普及に據らなければならぬ。そこに國語の平易化、國字の簡素化が認められる。現時日本においてはこの点が特に必要であろう。同時に純正なる國語の愛護の必要も説かなければならぬ

い。」というものであった。国語の平易化・国字の簡素化の主張は、「國民の國語運動連盟」の方針にも見られるものであり、その点で当時の民主的な言語改良運動の一翼を担っていると見てよいであろう。

以上の4点を通して言えることは、『日本の言葉』の性格は、宮良が大正期以来行ってきた全国的な調査に基づく方言の研究のような、地域の言語的実相を踏まえた科学的な日本語研究を通じて、同時に戦後初期の民主的な「国語の改革」の動向を視野に入れつつ、国語の平易化・国字の簡素化・国語の愛護を中心とする言語改良を追究するというものであろう。そして、それは宮良の個人雑誌などではなく、日本語を全体的に問題とする日本の言葉研究会の機関誌であり、「総合雑誌」としての性格を志向するものであったと言えよう。

次に、『日本の言葉』の資料的意義について触れたい。

すでに見てきたように、『日本の言葉』は戦後初期の民主的な「国語の改革」を背景にした、日本語の改良を全体的に目指した国語学関係の民間団体——日本の言葉研究会の機関誌である。そこには、「国語の改革」に関わる日本語の全体的な問題が反映しており、当時の国語学の課題や言語改良運動の課題と日本の言葉研究会会員の問題意識が示されている。そのことで、当時の様子や日本の言葉研究会会員個々人の対応や言語研究を検討する際の資料とすることができる。また、雑誌の編集は、ある意味で人の組織化であり、研究の交流の組織化という性格をもっている。そして、そのことが、ひとつの運動の性格を形成することになるのである。『日本の言葉』に即して言えば、大西雅雄、釘本久春、東條操、金田一京助、神保格、ハルバン、土井忠生、佐伯梅友などの言語研究者を組織する一方、柳田國男、宮本常一、大藤時彦といった民俗学の研究者を組織しているのである。国語学と民俗学の研究的な交流を宮良自身表現していると同時に、雑誌上で実現しているのである。この交流が、この雑誌のユニークさを示していると同時に、そのことがそれぞれの研究にどのような意味をもったのかを見ていく際には、貴重な資料となるであろう。さらに言えば、編集者宮良當壯の、戦後初期における「国語」観や、言語改良運動に対する立場や見解を解明していく上で、さらには宮良の人物研究を影響を与えた人々との関わりから行っていく上で、本誌は貴重な資料を提供していると言えよう。続けて宮良の方言観に関して言えば、彼は創刊号に掲載された「『日本の言葉』発刊にあたつて」の中で、次のように述べたことが注目される。

「方言はその地方の人にとっては、父祖傳來の言葉であるから、決して卑しい言葉でもなく、おかしい言葉でもなく、正しい言葉である。日本語という大きな立場から見ると、どの方言にも、それぞれ特有のうるわしさがあり、また、何ともいうにいわれぬ味わいのあるものである。かつて、標準語の普及に性急であつたがために、方言を捨てろ、と無理をいつた人もあつたが、實際問題になると、方言の勢力のあなどることの出来ないことを

知つて、尻に帆を掛けて頬被りをしてしまつたものがあつた。標準語は國家の統一した言葉であるから、何人でもこれを自在に話さなければならないのであるが、標準語を使うのために、方言を捨てるということは、意味をなさない。」（3頁。）

1940（昭和15）年日本民芸協会の柳宗悦らと沖縄県学務部との間で展開された方言論争に際して、宮良がどのような立場をとっていたのか、これまで何も分かっていなかった。しかし、上記の文章を見れば、方言を捨てさせようとする沖縄県学務部の言語政策に対して、宮良は反対であったことが窺われる。このことが、方言論争や宮良の言語研究に対して、どのような意味があるか、今後検討していく必要があるように思われる。そうであれば、その立場を鮮明にしている宮良の論稿が掲載されている『日本の言葉』の資料的意義はいっそう増してくるであろう。そしてこの点は、沖縄県の国語教育史研究にとっても注目される点であろう。

沖縄県の国語教育史の面から見ると、『日本の言葉』の資料的意義は、八重山方言や琉訳聖書に現れた琉球方言の存在であろう。方言の復権が語られている今日、万国音表文字による琉球方言の表記は、宮良が示している日本方言音表とともに貴重な教材と考えられる。それを「国語」教育にどのように生かしていくかは、今後の課題となるであろう。

おわりに

以上、述べてきたことをまとめておこう。

『日本の言葉』は、1947年6月1日、編集者宮良當壯、発行者遠藤欣一郎、印刷所アボロ社、発行所日本の言葉研究会という形で創刊された。四六倍判、32頁立て、通巻7号発行されたこの雑誌は、民主的な「国語の改革」の機運を背景にしつつ、遠藤や柳田國男らの支援を得て、科学的な言語研究に基づく、日本語の言語改良を目指す総合的な国語学関係の雑誌という性格のものであった。そのため、論稿には当時の「国語の改革」に関わるものや、民俗学関係のもの、方言研究関係のものが多く掲載されている。その点に、この雑誌の資料的意義があるが、編集者宮良の「国語」観、言語改良運動に対する対応、人物を探っていく際の貴重な資料となっている点にも意義がある。とりわけ、彼の方言に対する肯定的な立場の表明や、琉訳聖書に見られる琉球方言に対する研究は、沖縄県の「国語」教育史研究からも注目されるものである。そういった面からも、評価されるべき意義が、この雑誌にはあると考えられる。

最後に、この雑誌について全体的に論じたため、個別の論文や宮良の言語研究などについては、掘り下げて論じることができなかつた。その点は、今後の検討課題となっている。

注

- ①宮良當壯「日記（昭和22年2月27日）」『宮良當壯全集 第21巻』第一書房、1988年、397頁。
- ②琉球大学付属図書館にある個人文庫の中から、その所在を確認した経験に基づいている。
- ③遠藤欣一郎「宮良當壯先生を偲ぶ」『宮良當壯全集 月報16』第一書房、1984年4月、5頁。
- ④後掲の目次を参照のこと。
- ⑤滑川道夫「國語國字問題の動向」『生活学校』巖松堂書店、1946年10月、17頁。
- ⑥～⑦遠藤欣一郎「遅刊の辞」『日本の言葉』第7号、1948年9月、奥付の頁。